

## 受賞者の業績



阿部 淳子 53歳（栄養士・宮城県）

昭和38年、山元町に栄養士として奉職。以来今日まで一貫して栄養改善、母子保健の向上に努める。また公民館、保育所、学校と連携をとり、食を通じて健康増進活動に取り組み多大の成果をあげた。さらに食生活改善、推進員の養成と育成に貢献、他の組織活動に対しても積極的に支援する等、長期にわたり母子保健の向上に貢献し、今後も活躍が期待される。



齋藤 静子 54歳（保健婦・山形県）

昭和41年、和郷村役場（現南陽市）に保健婦として奉職。婚前学級、母親学級の開催等、妊婦、乳幼児と一貫した活動を展開、周産期死亡率の大幅な改善等地域の母子保健の向上に貢献。また福祉および教育との連携を深めるため福祉事務所、学校、警察署、児童相談所等からなる児童問題連絡会を設置して一元的な処遇を進める等、幅広い活動を展開している。



小保方 温子 54歳（保健婦・群馬県）

7年間の病院看護婦を経て、昭和46年、長野原町役場に保健婦として奉職。以来、へき地を抱えた山間部で地道な母子保健活動を展開。同48年には愛育班を結成、活動の自主性を尊重しつつ地域に密着した母子保健活動を推進。乳幼児健診の受診率、乳児および新生児死亡率等大幅な改善をみる。管内保健婦のリーダーとして後輩の指導と育成にあたっている。



遠山 たつ 44歳 (保健婦・新潟県)

2年間の病院看護婦を経て、昭和51年、村上市に保健婦として奉職。同57年母親学級を開設、家族計画、妊娠と育児に関する指導を行うとともに、就労婦人の力強い相談相手として指導力を発揮。同61年には育児の集いを開設して、若夫婦や転勤世帯の母親を対象に情報交換や仲間づくりを目的とした自主グループを結成、育児不安への解消に努めている。



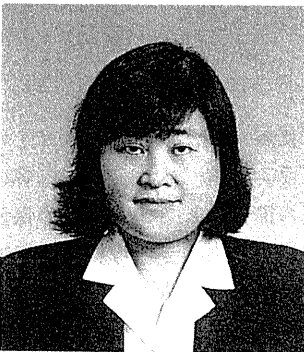
伊藤 あつ子 47歳 (保健婦・石川県)

1年間の病院勤務の後、中島町に保健婦として奉職。低率の続く出生率と、低体重児の出生率が高い中において、これを改善するための学習の「場」づくりを住民参加のもとで積極的に推進した。また、地場産業の変化により働く母親が増加したため、おばあちゃんと若い母親の世代間交流を積極的に推進し、育児不安の解消を図り、住民から高い評価を得ている。



伊藤 美恵 51歳 (保健婦・長野県)

3年間の病院看護婦勤務後、豊野町および茅野市の保健婦として奉職。豊野町では農家の若妻グループを結成、冬期の農閑期を利用して子育て、家族計画、嫁としての悩み等を話し合い、指導、人工妊娠中絶の減少をみる。茅野市では特に心身障害の早期発見、治療に力を入れるとともに、急増する外国人母子のための支援事業を開始、外国人の心強い味方となる。



張山 あけ美 46歳 (保健婦・岐阜県)

昭和49年、中津川市に奉職。一貫して地域の母子保健活動に従事、特に歯科衛生士とともに虫歯予防デーの定着に努力、幼児の歯科衛生の向上に大きく貢献した。同54年には全国的に脳性麻痺等障害児の早期発見療育に関心が高まるなか、県下で初めて保健の立場で乳幼児の運動発達相談を開設するとともに各健康診査の見直しを行い、多くの成果をあげている。

大 崎 夏 子 48歳 (保健婦・兵庫県)



昭和46年、黒田庄町役場に保健婦として奉職。以来、正しい性知識や家族計画の必要性を普及啓発するために婚前学級や新婚学級を開催。また父親の育児参加を促すために両親学級を開催。また、核家族化、育児不安、早帰り分娩の増加に対応し、全家庭の新生児訪問を実施。休日・夜間にも電話が入るほど住民から頼りにされている。さらに禁煙教育にも力を注ぐ。

林 由美子 45歳 (保健婦・広島県)



6年間の病院看護婦を経て、現在は河内町の保健婦として奉職。所管の妊産婦・新生児の家庭を全戸訪問して現状把握に努め、乳児死亡率、周産期死亡率はゼロとなった。また乳児健診、1歳半健診、3歳児健診の受診率はいずれも100%近い数字を示している。さらに平成4年、母子保健の水準を高めるため、関係者からなる母子保健チームを設置し、向上に努める。

岡 部 佐千子 50歳 (助産婦・徳島県)



看護専門学校で教員在職中、助産婦教育の一環として学生と共に妊産婦・新生児訪問を実施。地域に密着した活動の必要性を痛感、平成元年、助産院を開設。保健所の委託による新生児訪問のほか、核家族等の支援のためボランティア電話相談を実施。内容も母子のほか、思春期、更年期と多岐にわたり、その活動は地域住民から厚い信望と期待が寄せられている。

藤 堂 信 子 50歳 (保健婦・愛媛県)



看護婦、教員を経て、昭和50年宇和島市へ保健婦として奉職。初産婦を対象とした母親教室では、夫婦で参加するプログラムを取り入れる等、内容の充実を図る。また、乳児保健相談では乳児発達の節目として7か月児の保健相談を定例化、米所相談が困難な遠隔地にも積極的に出向き、母親の育児不安、負担の解消に取り組む等、精力的に活動を展開している。

北野明子 44歳 (医師・福岡県)



昭和61年、小児科を開業。甘木市では数少ない小児科専門医の立場から母子保健の整備充実に取り組む。同63年、甘木市朝倉医師会の腎臓検診班に所属、平成3年、その手腕が認められ班長に抜擢され、児童・生徒の腎疾患予防に多大な成果を収めた。また、小児の予防接種を県下でいち早く個別接種へと移行させるなど、地域母子保健に多大な貢献をした。

蒲原知愛子 46歳 (保健婦・佐賀県)



国立嬉野病院勤務を経て、昭和52年より嬉野町役場に奉職。同57年には妊娠中から就学時までの保健指導カルテを作成、平成4年には4・5歳児健診を開設して就学時相談への橋渡しとするなど、地域母子保健事業の一貫したシステム化を図る。また、思春期体験学習や育児学級の開設等、住民へ積極的に働きかけるなど、地域母子保健に多大な貢献をした。

山田律子 52歳 (母子保健訪問指導員・札幌市)



昭和55年、札幌市の委託により巡回相談指導を開始。過去16年間に延べ6000件以上の母子訪問活動を展開。担当地域内ではほとんどが核家族のため、出産・育児に対する援助者が少ない状況にあるなか、地道な訪問活動により育児不安の解消に取り組む。指導を受けた母親などからは、その後の指導を請う声が寄せられ、母子のよき理解者として慕われている。

江戸由美子 51歳 (助産婦・横浜市)



昭和42年、県立母子保健センターに奉職。4年間の開業医院勤務後、現在まで行政助産婦として地域の母子保健の向上に尽力。保健所業務のかたわら、障害児の親の会の組織づくり、勤労等で母親教室に参加できない妊産婦の会の育成、地域子育てグループの組織化・ネットワーク化など、大都市における育児不安の解消と自主的母子活動の推進を図っている。